

作業内容	評価			評価内容
	合	一部可	不可	
端をそろえようとする		○		そろえようとするが、どうすれば揃うか推測できない
大きさを均等にしようとする			○	まったく意識がない
汚れを気にする	○			
まがりを気にする	○			
完成度を高めようとする			○	完成度の判断ができない
全体のバランスを取ろうとする			○	全体に視線を合わせることができない
片付けをする	○			
ケガへの留意		○		声かけをすれば適切に留意できる

作業内容	評価			評価内容	作業内容	評価			評価内容
	合	一部可	不可			合	一部可	不可	
作業準備(道具の用意・確認)	○				情報の正確さ		○		説明時に主語がないので、正しく相手に伝わらない
郵便物の受け取り		○			情報の過不足			○	不足。教えなければいけないことを選別できない
口頭での伝達事項の受信			○		教え方の工夫		○		実物を見せたり、比べたりして行う
					態度	○			高慢になったり、命令口調にならずに教えられる

郵便物の仕分け

作業内容	評価			評価内容	相手との協力	作業内容	評価			評価内容
	合	一部可	不可				合	一部可	不可	
部署別に仕分けする		○		一部のみ注視、思い込みが強く誤った仕分けをしてしまう						
宛先・差出人等の理解			○	切手等の知識なし		作業分担ができる			○	
特殊郵便物の理解			○	速達・書留・転送等知識なし(言葉は聞いたことあるとのこと)		相手への適切な声かけ			○	
文字の判別	○					相手への適切な返答		○		ちぐはぐな返答をする事が多々ある
省略の推測	○					相手の動きの予測			○	
内容物からの推測		○		一部のみ		相手と適切な距離			○	
名簿の参照	○					意識				
名前の検索	○					作業内容	評価			評価内容
名簿の使い分け	○						合	一部可	不可	
郵便物の整理			○			正確に行おうとする	○			
作業終了報告		○		細部にわたって報告してしまう		すばやく作業をしようとする			○	
分類不能の郵便物の処理			○			合理的に作業しようとする			○	
						相手への配慮			○	

郵便物の配達

作業内容	評価			評価内容
	合	一部可	不可	
部署毎に指定された場所に配達する			○	場所、配達法等が覚えられない
丁寧な郵便物の取り扱い	○			
安全に配慮した移動		○		物は避けられるが、人は避けられない

コミュニケーション

作業内容	評価			評価内容
	合	一部可	不可	
挨拶	○			
場に応じた声量		○		相手が電話時のみ小声になる
場や人に応じた言葉かけ		○		詳細まで話してしまう。話の省略、まとめができない
場や状況に応じた動き			○	周囲の状況に視線を向けない
道のゆずり合い			○	周囲の状況に視線を向けない

指示理解

作業内容	評価			評価内容
	合	一部可	不可	
道具の準備・使い分け		初回		使いやすい工夫ができるときがある
郵便物の仕分け		初回		不要な確認(差出人等)が多く、作業に支障あり
郵便物の配達		初回		非合理的な順序を選択する
状況判断			初回	
質問		初回		細かなところまで質問しすぎてしまう
態度			初回	あくび、外言化

作業内容	評価			備考
	合	一部可	不可	
集合		○		時間に遅れていても急がない
作業準備		○		靴や上着を卓上に置く
一斉合図による作業開始			○	1回個別確認
自分の作業分担の遂行		○		作業は正確だが、やり残しがある
作業が終了していない他者への協力		○		協力姿勢は見られるが、行動化しない
他者への適切な声かけ		○		謝罪のみ
他者との共同作業			○	相手のペースに合わせられない
作業スペースの工夫			○	作業している人のところでもかまわず行う
作業ペースの調整		○		終了時間は気にかけているが、調整まではいかない
作業終了報告		○		報告はできるが、自分の作業が完了しているかの確認なし
一斉終了	○			他者が終わるまで待っている
モラルの遵守		○		個別にはできるが、集団場面では批判的な言葉を口にしてしまう

清掃技術

作業内容	評価			備考
	合	一部可	不可	
掃除機	○			細部まで行えるが、つまりが気になり、よく掃除機を開ける
雑巾かけ(しぼり)	○			
ホコリ落とし	○			
水やり	○			

1.郵便作業(個別作業)

R9<初回>

郵便物の準備・受け取り

作業内容	評価			評価内容
	合	一部可	不可	
作業準備(道具の用意・確認)		○		一度の説明で可能だが、非合理的な行い方をすることがある
郵便物の受け取り(段ボール入った毎回重さの異なる荷物の受け取り)		○		可能だが、視覚で重さの推測ができない。体格に比べて重すぎるものを持ってしまったりと、力のコントロールが難しい
口頭での伝達事項の受信			○	本人の想定外のことだと、全く理解できず誤った解釈をこじつける

郵便物の仕分け

作業内容	評価			評価内容
	合	一部可	不可	
部署別に仕分けする		○		部署名と宛先が完全に一致するもののみ可能
宛先・差出人等の理解			○	手紙を出したことがあるとの事だが、宛先住所・人名・差出人の区別ができない
特殊郵便物の理解			○	速達・転送・差戻等一切知識なし
文字の判別	○			パソコン打ちから旧字体、歪んだ文字等も正しく判別できる
省略の推測			○	省略形で書いてあるものを全く予測できない
内容物からの推測			○	一度説明してだけでは困難
名簿の参照	○			
名前の検索	○			
名簿の使い分け			○	一度説明しただけでは不可能。全種類の名簿を同順序で全部見て検索
郵便物の整頓		○		声かけをした場合のみ、説明がなくても正しく整頓できる(郵便物を整頓した方がよいという意識がない)
作業終了報告・片付け			○	
分類不能の郵便物の処理		○		質問することができる

作業内容	評価			評価内容
	合	一部可	不可	
部署毎に指定された場所に配達する			○	各部署の場の違いが見分けられない(違う部屋に入っても同じだと思ってしまう)
丁寧な郵便物の取り扱い	○			
安全に配慮した移動	○			

コミュニケーション

作業内容	評価			評価内容
	合	一部可	不可	
挨拶	○			
場に応じた声量			○	一本調子の声量、イントネーションである
場や人に応じた言葉かけ			○	どこでも、いつでも同じセリフを言う。イレギュラーに質問等には対応できない
場や状況に応じた動き			○	どこでも、いつでも同じ速度で同じ動きをする
道のゆずり合い		○		エレベーターのみ、ゆずり合いができる(自宅マンションで日常的に体験)。その他廊下等では道をゆずると意識がない

指示理解

作業内容	評価			評価内容
	合	一部可	不可	
道具の準備・使い分け		○		
郵便物の仕分け		○		
郵便物の配達			○	配達物のグループの名称と各部屋の表示、地図の名称の記載のマッチングが完全に一致していないとできない
状況判断			○	周囲を見ていない。周りがどのような状況であるのか気にしなければならない意識がない様子
時間配分と調整			○	(初回)時間を気にするが配分・調整はできない(一ヶ月)予め一日の仕事内容を整理し、時間配分ができる
態度	○			真面目に取り組んでいる印象がある

2. 郵便作業(共同作業)

R9

作業内容を他者に教える

作業内容	評価			評価内容
	合	一部可	不可	
情報の正確さ	○			自分の教わったことを教わったままの形で教える
情報の過不足	○			省略、指示語、代名詞を一切しないで説明するため長くなるが、情報は正確
教え方の工夫	○			相手の様子を見て、適宜情報を伝えられる
態度	○			丁寧語を使い、高慢な態度になったりはしない

相手との協力

作業内容	評価			評価内容
	合	一部可	不可	
作業分担ができる			○	効率の良い作業分担を考慮することができない。交代ようになってしまう
相手への適切な声かけ			○	声かけをせず、行動したり物を渡したりする
相手への適切な返答	○			聞かれたことには正しく答えられる
相手に合わせた動き			○	相手の動きを見ていない
相手と適切な距離			○	近すぎても遠すぎても気がつかない。調整しない

意識

作業内容	評価			評価内容
	合	一部可	不可	
正確に行おうとする	○			
すばやく作業をしようとする			○	
合理的に作業をしようとする			○	
自分のやりやすいように工夫して行う			○	指示通りの動きのみ

R7さんの個別支援計画スケジュール

支援項目・課題	担当	生活リズムを整える・職業適性を探る				職業訓練に取り組む → 就職活動をする			
		H21.10月	11月	12月	H22.1月	2月	3月	4月	5月
生活面	就寝・起床時間の安定	植木 小林		屋間も眠たくなく活動するために、アルバイトの時間に合わせ寝る時間、起きる時間をコントロールできるようにします。					
	人との関係づくりの学習	車谷 (予定)		相手や場面に応じた行動(敬語の使い方、声の大きさの調整など)を選べるようになります。					
	スケジュール帳の活用	小林		予定(アルバイト、訓練、就職活動関連、週末)や約束事を忘れないようにするために、スケジュール帳を無理なく使う習慣を身に付けます。					
	お金の自己管理	小林		将来一人暮らしをする時のために、給料の使い道、貯金の仕方などについて考え、自己管理できるようにします。					
	仕事内容の幅について知る	植木 遠藤		就職面接会参加、企業実習などの経験を通して、働き方の様々な形態について知ります。					
職業面	自分に合う仕事を探る	四ノ宮 遠藤 植木							
	仕事の訓練	加藤 他		各訓練、環境に慣らしながら7/16日に参加します。				職業訓練	
	就職活動	四ノ宮 遠藤 植木		(手帳の申請)				就職登録	
	ネットワーク作り	四ノ宮 遠藤 植木		就職や生活面をサポートする関係機関の人と知り合い、仕事探しや仕事に就いた後のアドバイスをもらいます。				就職準備	
								就職活動	

図2

R9 様個別支援計画スケジュール

支援項目・課題	担当	体験を通して、仕事の適性を探る				職業訓練 → 就職活動をする		
		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月
作業療法	車谷	作業をする時の体の使い方を学びます。						
休みの取り方	植木 小林	予定を忘れないため、また約束した日程が重ならないように、メモをとることや、スケジュール帳を無理なく使う習慣を身に付けます。						
自分に合う仕事を体験する	職業指導員 四ノ宮 遠藤 水村	第2就労組立訓練 (2週間) ※2月15日～		第3就労 クリーニング (1～2週間) ※3月8日～				
		第1職場体験訓練 (1週間)						
		パソコン事務 個別7-5から、集団の部屋へ				第5就労(事務の技能習得) 伝票チェック・データエントリー Word, Excel 等		
		センター内実習(郵便物の仕分け等)				必要に応じて継続する		
		センター外実習				センター外実習(企業の特例子会社等) 会社の人との関わりや仕事の指示を理解して働く経 験を積みみます。		
就職準備・就職活動	四ノ宮 遠藤 水村	(手帳の申請)	就職準備 (履歴書作成等)	職安で 求職登録	就職活動			
〇〇市内で支援を受けられる 人達と知り合いになる	四ノ宮 遠藤 水村	地元周辺で、就職や生活をサポートする関係機関の人と知り合いになり 仕事探しや仕事に就いた後のアドバイスをもらいます。 月 日 障害者就業・生活支援センター〇〇△△へ相談・登録する。 〒 埼玉県〇〇市						

図2

青年期発達障害者の円滑な地域生活移行への支援についての研究

分担研究者 高木晶子 国立秩父学園

研究協力者 鈴木繭子 国立障害者リハビリテーションセンター

藤井知亨 国立秩父学園

研究要旨

今回の研究の「所沢モデル」では、「所沢市に存在する発達障害専門診療機関」のひとつとして、国立知的障害児施設秩父学園発達診療所を利用している。青年期の発達障害者に対する診療のなかで「就労を支える地域生活」を困難にしている諸因子の分析とその支援のあり方に関して検討した。なかでも対象者の最大の環境因子である家族関係に焦点をあて、青年期の発達障害者を有する家族の家族支援のあり方を検討するため、以下の心理検査等を含む調査と分析を施行した。

1. 研究対象者は「青年期発達障害者である本人」と「その家族」である(以下本人と家族と記す)。内訳は6家族で、本人3例とその家族7例、計10名の協力を得た。広汎性発達障害(以下PDDと記す)下位診断の内訳は特定不能の広汎性発達障害(以下PDDNOSと記す)6名であった。対象者は18～24歳までの青年であり、本人もしくはその家族に診断が告知されており、児童期から介入を受けてきたケースとその家族であった。
2. 施行した各々の検査の相関を検討した。SRS-A総合得点とFDTタイプとの間に相関が認められ、親評価によるPDD特性が高いほど親子関係が不安定になることが示唆された。親子関係の安定にはPDD特性が重要な因子となる可能性があり、家族が持つ対象者の特性に対する困難さを具体的に支援することが必要と考えられた。
3. SRS-A下位検査項目及びFDT下位尺度について親子ペアのプロフィールを比較検討した。親子ペアのプロフィールについては3例中2例で親子間での一致が認められた。プロフィールが一致することは、本人の親子関係およびその他の対人相互関係に関する認識が親子間で一致していると推定された。
4. 発達障害に関する一般的な理解と知識獲得は全例で良好であった。自由記述において一般的な知識に関する記載はあるが、個別の特性や対応が記述されていないケース(3例)が認められた。1例は親子ペアプロフィールの不一致であり、2例はMASでL得点を示した。この3例は現段階で取り組むべき支援課題が認められるケースであった。今回使用した国立障害者リハビリテーションセンター版発達障害理解度チェックシート・青年版(以下理解度チェックシートと記す)は発達障害の理解度を測るのみならず、対象者への支援の状況及びそこから推定できる課題が示唆された。
5. MASの結果において7例中6例に親の不安が認められなかった。不安が認められた1例はFDT、SRS-A、理解度チェックシートともに問題を認めなかった。この結果から、親子関係、対象者の対人相互関係と自己理解の状態、発達障害に関する適正な知識獲得とは別の要因で親の不安は規定されていると推定された。親のメンタルケアを進めながら親の不安が規定される要因を今後検討していく必要がある。
6. 本人の自己理解において、「親子間の認識の一致」と「支援の早期介入」が重要な因子と推定された。「支援の早期介入」が親の不安度に与える影響は今後、詳細に検討する必要がある。

A. 研究目的

青年期の発達障害者の社会参加をめざし有効な家族支援モデルのあり方を探ることを目的として、本人の最大の環境因子である家族との関係に焦点をあて、青年期の発達障害者とその家族の支援方法を検討するため、以下の調査と分析を施行する。

B. 研究方法

1) 対象者

対象は国立知的障害児施設秩父学園発達診療所(以下「発達診療所」と記す)に受診している青年期・成人期の発達障害者とその家族である。この研究協力に参加した対象者は10名であり、6家族、本人3例、家族7例であった。6家族のうち3家族は本人参加の同意が得られなかったため、家族のみが参加した。内訳は親子3組、父母1組、母のみが3例であった。

本研究の対象者の条件は以下に記す。

- ①生活年齢18歳から24歳までの青・成年であり、医療機関において広汎性発達障害の診断を受けている。
- ②本人もしくは家族に診断が告知されており、児童期から支援を受けている。
- ③この研究対象となる時点において未治療あるいは治療困難な精神障害等の併存障害を認めない。
- ④上記①②③の条件を有している本人と同居している家族であり、生下時より生活を共にしている。

2) 評価検査及び尺度

対象者には以下の心理検査及び評定尺度を施行した。

- ①対人応答性尺度成人版 (Social Responsiveness Scale – Adult : SRS-A)

今回使用した SRS-A の日本語版は本研究の分担研究者である神尾(国立精神・神経センター)が著作権を得ている。

SRS-A は、自閉症スペクトラムの児童の日常生活で観察される行動特徴から自閉症的症状を一元的に評価する 65 項目からなる、親または教師記入式の 4 件法質問紙 SRS の成人版である (神尾、2009)。SRS で測定する自閉症的行動は PDD の重症度を反映すると考えられている。

- ②日本版 MMPI 顕在性不安検査 (Manifest Anxiety Scale : MAS)

MAS は、個人が抱く不安、すなわち身体的、精神的な不安で明らかに意識されるものを測定し、その不安の程度を明らかにすることを目的として作成された²⁾。質問項目は虚構点 15 項目を含む 50 項目から構成されている。

- ③親子関係診断検査 (Family Diagnostic Test : FDT)

FDT は親子関係の情緒的側面から親子関係の質を測定することを目的に開発された検査¹⁾である。子ども用は父母各 60 項目 8 尺度、親用は 40 項目 7 尺度から構成されている。本研究では中・高校生版を使用した。

- ④国立障害者リハビリテーションセンター版発達障害理解度チェックシート・青年版 (以下理解度チェックシートと記す)

発達障害の知識獲得前の状態を想定して、対象者の現状の知識レベルを推定することを目的としている。国立障害者リハビリテーションセンター発達障害診療室において作成した理解度チェックシートを使用した。

上記の諸検査を対象別に以下のように施行した。本人には①SRS-A、③FDT を施行した。家族には①SRS-A、②MAS、③FDT、④理解度チェックシートを施行した。

3) 研究協力に関する対応

対象 10 名について、診療時間内に本人と家族それぞれに質問紙を施行した。なお、各事例の生育歴、家族歴等に関して外来カルテの記載を参考にした。

<倫理面での配慮>

国立秩父学園の倫理審査委員会の承認済みである。研究参加者へ研究目的、そこで生じるリスク、個人情報の管理と保証について口頭と文書で説明した。同意が得られた場合のみ同意書を作成して協力を得る等、参加に関する自由な自己決定(本人と家族)を含む人権に関する配慮を十分に施行した。また、個人情報はカルテと同じ基準で保管している。研究データは個人情報を外した連結可能匿名化臨床情報として保存している。

C. 研究結果

1) 対象者の内訳及び知能検査結果

対象の内訳(表 1)は、6 家族、本人 3 例、家族 7 例である。

知能検査結果の FIQ において、1 例 (No.5) が「軽度精神遅滞^{註1)}」(IQ50~70 まで)に位置した。他に IQ84 以下の「境界領域^{註1)}」に位置する例が 3 例認められた。1 例は知能検査を施行していない。上記の結果から研究対象者(本人)の 6 例中 4 例に IQ に課題がある。

(注 1: IQ の区分は DSM-IV-TR 診断基準による)

2) SRS-A

本人 3 例、家族 7 例から得られた SRS-A 総合得点(0-195 点)、5 つの下位領域において粗点のまま分析した(表 2)。

・SRS-A 総合得点(本人)

全例(3 例)から回答があり、3 例中 1 例が米国版 SRS における基準による臨床診断域得点(87 点以上)を満たしており、1 例が「日常生活に中程度の支障をきたす PDDNOS やアスペルガー障害を含む高機能自閉症スペクトラム域(54 点以上 86 点以下)、1 例が正常域であ

った。

上記に示した数値は「高機能自閉症の男子を親が評価した場合の区分」であり、今回のデータにおいて参考値とした。

・SRS-A 総合得点(家族)

全例(7 例)から回答があり、臨床診断域得点は 3 例、高機能自閉症スペクトラム域は 4 例で、正常域例は認められなかった。

3) MAS

MAS 施行は家族のみで 7 例であった。そのうち明らかな不安が認められたのは 1 例のみであった。疑問得点が高く、回答に信頼性がないとされたのが 1 例、L 得点(虚構得点)が高く、回答に妥当性がないと推定されたのが 2 例認められた。

4) FDT

FDT は本人 3 例、家族 7 例に施行した。FDT は各尺度の得点を関連づけながら基本的に安定した親子関係か、あるいは不安定な因子が存在するのかという観点から、パターン分類する。パターン分類結果は表 3 に示す。本人の結果において 3 例ともに父、母ともに典型的な安定型~安定型である。家族の結果では 4 例が典型的な安定型~安定型、3 例が不安定型にパターン分類された。

尺度ごとにレッドゾーン(危険区域)が設定されており、それぞれのレッドゾーンに位置した被験者数を示した(表 4)。本人の結果において、レッドゾーンに位置した項目は被拒絶感、積極的回避、両親間不一致尺度であった。家族に認められた項目は、厳しいしつけ、達成要求、不介入、基本的受容であった。

特に達成要求尺度では、家族 3 例がレッドゾーンに位置し、いずれも低い値であった。レッドゾーンに位置しない 4 例も達成要求尺度は 15~44%の低い値に位置している。この結果から発達障害者の家族において達成要求が低いことが示唆された。一方、本人の結果において達成要求の項目でレッドゾーンに位置するケースは認めなかった。

親子ペアが成立したケースに関して、FDT の

各尺度を比較したグラフを作成して検討した(図 1-1、1-2、1-3)。図 1-1 の No.1、No.2 の親子ペアのグラフは一致しなかったが、他の 2 ケースのプロフィールは一致していた。

5) 理解度チェックシート

家族 7 例に施行した。理解度チェックシートの正解率は高く、79~95%の正解率であり(表 5)、全例ともに発達障害に関する理解と知識獲得が良好であった。

6) 各検査間の相関

SRS-A、MAS、FDT についてそれぞれの検査間における相関について検討したが、明らかな相関が認められたのは SRS-A×FDT タイプであった(表 6)。表 6 では SRS-A の総合得点により 3 群(臨床診断域群、スペクトラム域群、カットオフに満たなかった群)に分け、それぞれの FDT タイプと照合した。親の結果において SRS-A 臨床診断域群は FDT タイプが不安定型(D)となっており、スペクトラム域は安定型(A、B)を示した。しかし、本人の結果では FDT タイプがすべて安定型となっているため相関は認められなかった。

D. 結論

1) 各検査の所見について

①SRS-A 下位領域得点(親子比較及び夫婦比較)の結果について

SRS-A は対人的気づき(AWE)、対人認知(COG)、対人コミュニケーション(COM)、対人的動機づけ(MOT)、自閉的常同症(MAN)の 5 つの下位尺度に分かれており、プロフィール分析及び経過の把握が可能とされている。本研究では下位検査プロフィールについて、親子及び夫婦のペアのプロフィールを比較し検討した(図 2-1、2-2、2-3、2-4)。

図 2-1 の No.1、No.2 の親子ペアは総合得点の差は 61 であり、下位検査プロフィールも一致しなかったが、他の 3 ケースのプロフィールは一致していた。この親子間の下位プロフィー

ルの一致は「本人の主観的な困り感に対する自己理解」と「親が観察している本人の困り感」の一致と推定している。

②MAS による顕在性不安について

MAS における疑問得点は被験者が「どちらともいえない」と答えた項目の数を表しており、この得点が高い場合は妥当性が疑わしくなるため、判定の中止あるいは再検査を検討する。

L 得点は「社会的望ましさ」の尺度とも言われ、被験者が自分を好ましく見せようとすることによって起こる反応の歪みを調べる尺度である。

MAS の結果、1 例を除き親の不安が認められなかった。親の不安が認められた 1 例(No.2・母)は FDT、SRS-A、理解度チェックシートともに問題を認めなかった。本人(子)は障害告知を受けており、親子関係も安定している。しかし、診察場面においては親から就労継続や社会人としてのソーシャルスキルの獲得に関する不安が語られている。

以上の結果より親の不安は本人の自己理解及び家族関係の安定とは別の要因で規定されることが推定された。親のメンタルケアを進めながらどの要因によって規定されるのかを今後検討していく。

③FDT について

FDT 結果からは家族における達成要求尺度が低いことが明らかとなった。達成要求は以下の設問で構成されている。「自分の果たせなかった夢を子どもに託したい」「子どもには社会的に尊敬される職業や地位についてほしい」「子どもにはできるだけ学歴をつけてやりたい」「子どものためには惜しまず金を使う」「子どものためにやってやれることは、親が多少犠牲になってもやってやりたい」、以上の 5 項目である。子どもへの過剰期待の程度を測定する尺度であり、ある程度であれば子どもは親の愛情と受け取るが、強すぎると大きな圧力と感ずる場合もあり、中庸が望ましいとされている。今回の対象者は、達成要求を低くすることで周囲との比較を避け、本人の成長の

ペースにあわせて要求をコントロールしていることが推定された。本人のレベルにあわせて要求レベル自体をコントロールすることにより、不安や親子関係の安定が保たれている可能性も考慮される。

FDTにおいてもSRS-Aと同様に、親子ペアが成立したケースに関して、対応する尺度を比較したグラフを作成し検討した(図 1-1、1-2、1-3)。SRS-Aの親子ペアと同様のケース、No.1、No.2の親子ペアのみが一致せず、他の2ケースのプロフィールは一致するという結果となった。

FDTは親子の関係性について親と子それぞれがどのように認識しているのかを質的に測定する検査である。つまり親子間で尺度間が乖離するということは、親子の相互認識に相違があることを意味し、親子間で発するメッセージが適正に受け取られていない可能性が考えられる。F1ケースはこういった親子関係の相互認識において乖離があることがFDTによって示唆されたと推定している。

④理解度チェックシートについて

発達障害に関する一般的な理解に関しては全例で良好であった。

また、設問3の自由記述は、発達障害が疑われる架空の青年の行動から原因を類推し、記述する課題である。

3例の自由記述では一般的な知識が記載されているが、本人の特性や個別の対応に関する記述が認められなかった。1例は親子ペアプロフィールの不一致ケースであり、2例はMASでL得点において高得点を示したケースである。この3例は現段階で対応すべき支援の課題が認められるケースである。

以上の結果より、理解度チェックシートは発達障害の理解度を測るのみならず、家族が対象者への支援をどのように考えているかという認識とそれに関連する課題を推定できた。

2) 各検査間の相関について

SRS-A、MAS、FDTについてそれぞれの検査間における相関を検討したが、明らかな相関が認められたのはSRS-A×FDTタイプであった(表6)。

家族結果では、SRS-A臨床診断域群はFDTタイプが不安定型(D)となっており、スペクトラム域は安定型(A、B)を示した。この結果から、親評価によるPDD特性が高いほど、親子関係が不安定になることが示唆された。PDD特性が高いタイプは、日常生活の困り感も強く、生活を共有している親子関係を不安定にすると推定される。親子関係の安定にはPDD特性が重要な因子と考慮しておくべきであり、これに関する家族支援が不可欠と考えている。

3) まとめとして

今回の研究では、青年期発達障害者とその家族に前述の諸検査を用いて、家族間の相互認識、障害に関する理解と知識獲得およびPDDの特性に関する自己理解等の状況を検討した。「地域社会で自立して生活すること」をゴールと位置づけ、どのように支援したら本人と家族が望む自立を実現できるのか、その影響因子を同定することを目的に研究を進めてきた。前年度の分担研究^{3) 4)}のなかで推定した「重要な環境因子である家族の安定が本人の安定につながる」ことが、今回で得られた結果と重なる。

本研究で示唆された所見として、1.対人応答性と家族関係の安定度に相関があること 2.親子の認識が一致することで安定した生活が可能になること 3.早期介入が行われた場合、不安軽減と知識獲得につながる可能性があることがあげられる。「親の精神面の安定は子の安定の重要な環境因子であり、双方の安定によって円滑な家庭生活が営まれ、地域社会への適応につながる」と考えている。

今後の課題として①親の安定のために必要な因子の分析 ②影響因子に関する詳細な同定 ③家族支援のための具体的な方法の開発を検討する必要がある。

今回の試みで課題が明確になった家族には適正な家族支援を行い親子関係を是正し、自己理解と自立の促進を検討し確立していく。そのためには「適正なアセスメント」を行い、査定結果に基づいた「的確な診断告知」、「そのケースに適った個別支援(家族支援を含む)の設定」を丁寧に施行することが重要である。

青年期の発達障害者を有する家族において、児童期から診断と支援を受けている場合、発達障害に対する理解度は高い。本人の適正な自己理解を得るには親子間の認識の一致と早期介入が重要な因子と推定された。今後、早期介入が親の不安度に与える影響を検討する必要がある。

参考文献

- 1)東洋、柏木恵子、繁多進、唐澤真弓：FDT 親子関係診断検査 手引。日本文化科学社。2009.
- 2)Taylor, J.A.阿部満州、高石昇：日本版 MMPI 顕在性不安検査使用手引。三京房。2007.
- 3)高木晶子：青年期発達障害者における医学的診断と支援に関する研究。厚生労働科学研究費補助金(障害保健福祉総合研究事業)分担研究報告書。In：深津玲子研究代表者。青年期発達障害者の円滑な地域生活移行への支援についての研究。平成 20 年度総括・分

担研究報告書。22-29。2009.

- 4) 青年期発達障害者における医学診断と支援。リハビリテーション連携科学 Vol.10 No.2, 93-98. 2009

E. 健康危険情報 なし

F. 研究発表

1. 原著論文による発表

神尾陽子、辻井弘美、稲田尚子、井口英子、黒田美保、小山智典、宇野洋太、奥寺崇、市川宏伸、高木晶子：対人応答性尺度 (Social Responsiveness Scale ; SRS) 日本語版の妥当性検証 広汎性発達障害日本自閉症協会評定尺度 (PDD-Autism Society Japan Rating Scale ; PARS) との比較。精神医学 51:1101-1109. 2009.

2. それ以外 (レビュー等) の発表

青年期発達障害者における医学診断と支援。リハビリテーション連携科学 Vol.10 No.2, 93-98. 2009

3. 学会発表

なし

4. 講演

福島県総合療育センター(発達障がい者支援センター) 2009/01/31 いわき市にて「発達障害の診断と支援について」

表 1 対象者の内訳

		本人	家族	家族	本人診断名	初診時年齢	知能指数
家族 1 (F1)	ケースNo. 年齢・性別	No.1 24 歳、男性	No.2 55 歳、女性	—	PDDNOS	18 歳 4 ヶ月	WAIS-R VIQ96、PIQ 77、FIQ87
家族 2 (F2)	ケースNo. 年齢・性別	—	No.3 44 歳、女性	—	PDDNOS	12 歳 9 ヶ月	WISC-III VIQ79、PIQ94、FIQ85
家族 3 (F3)	ケースNo. 年齢・性別	—	No.4 52 歳、女性	—	PDDNOS	13 歳 3 ヶ月	WAIS-III VIQ94、PIQ67、FIQ79
家族 4 (F4)	ケースNo. 年齢・性別	No.5 18 歳、女性	No.6 51 歳、女性	—	PDDNOS	11 歳 7 ヶ月	WISC-III VIQ53、PIQ93、FIQ69
家族 5 (F5)	ケースNo. 年齢・性別	No.7 19 歳、女性	No.8 50 歳、女性	—	PDDNOS	14 歳 6 ヵ月	WAIS-III VIQ86、PIQ68、FIQ75
家族 6 (F6)	ケースNo. 年齢・性別	—	No.9 49 歳、男性	No.10 48 歳、女性	PDDNOS	11 歳 6 ヵ月	— —

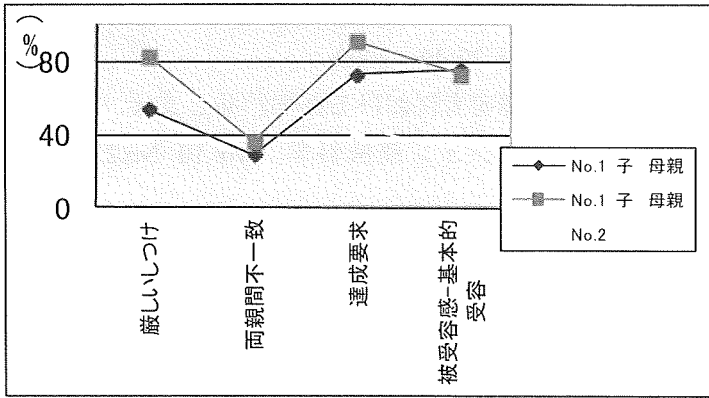


図 1-1 No.1-No.2 FDT 親子比較

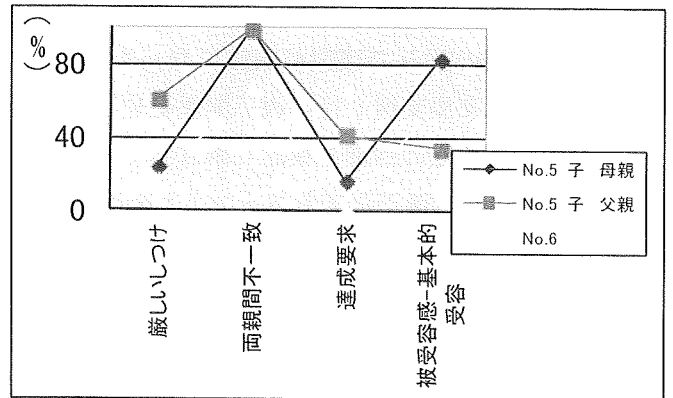


図 1-2 No.5-No.6 FDT 親子比較

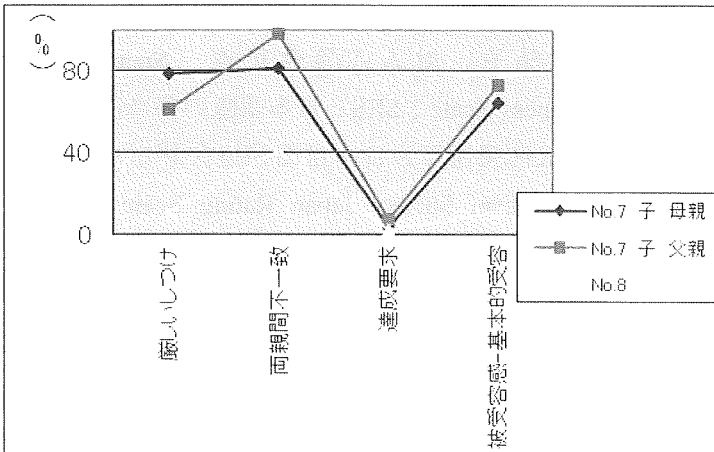


図 1-3 No.7-No.8 FDT 親子比較

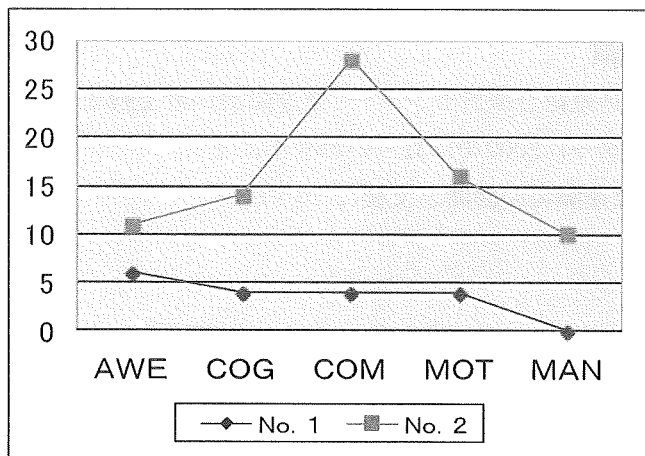


図 2-1 SRS-A 親子比較

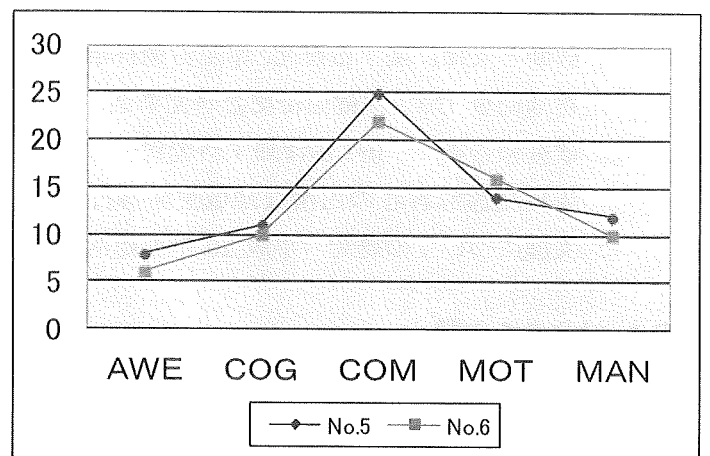


図 2-2 SRS-A 親子比較

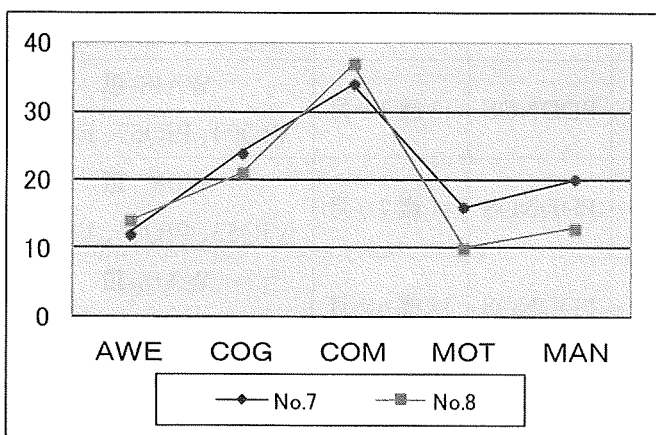


図 2-3 SRS-A 親子比較

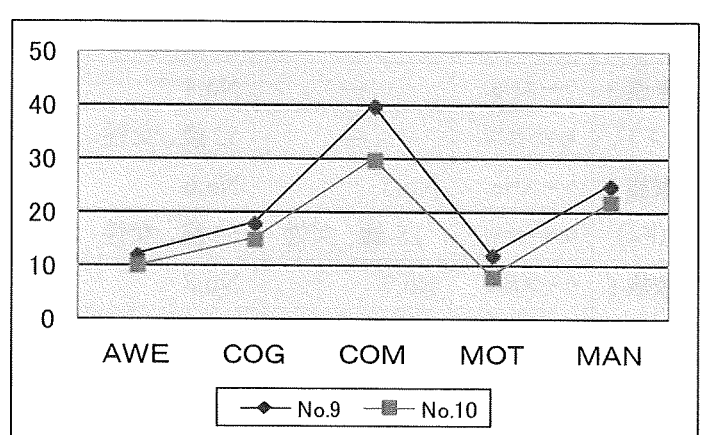


図 2-4 SRS-A 親子比較

表2 SRS-A 粗点一覧

	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8	No.9	No.10
SUM	18	79	73	125	70	64	106	95	107	85
AWE	6	11	8	14	8	6	12	14	12	10
COG	4	14	17	22	11	10	24	21	18	15
COM	4	28	22	40	25	22	34	37	140	30
MOT	4	16	12	21	14	16	16	10	12	8
MAN	0	10	14	28	12	10	20	13	25	22

表3 FDT パターン分類

本人		FDT パターン分類	家族	FDT パターン分類
No.1	父	A: 典型的な安定型	No.2	B: 安定型
	母	B: 安定型	No.3	A: 典型的な安定型
No.5	父	B: 安定型	No.4	D: 不安定型
	母	B: 安定型	No.6	B: 安定型
No.7	父	A: 典型的な安定型	No.8	D: 不安定型
	母	B: 安定型	No.9	B: 安定型
			No.10	D: 不安定型

表4 レッドゾーン獲得数(尺度別一覧)

本人(0~3)	父	母	家族(0~7)	子
被拒絶感	1	1	無関心	0
積極的回避	1	2	養育不安	0
心理的侵入	0	0	夫婦間一致	0
厳しいしつけ	0	0	厳しいしつけ	1
両親間不一致	2	2	達成要求	3
達成要求	0	0	不介入	1
被受容感	0	0	基本的受容	1
情緒的接近	0	0		

表5 理解度チェックシート正答数及び正答率

		No.2	No.3	No.4	No.6	No.8	No.9	No.10
総得点	正答数	16	16	18	15	18	18	14
	%	84	84	95	79	95	95	74
設問1	正答数	14	13	15	13	15	15	12
	%	88	81	94	81	94	94	75
設問2	正答数	2	3	3	2	3	3	2
	%	67	100	100	67	100	100	67

表6 SRS-A×FDT 対応表

SRS-A		ケース No.	FDT		ケース No.	FDT
87 点以上	親	4, 8, 10	D, D, D	子	7	父:A/母:B
54~86 点		2, 3, 6, 9	B, A, B, B		5	父:B/母:B
54 点以下		—	—		1	父:A/母:B

【参考資料】

「発達障害理解度チェックシート（思春期・青年期版）」問題一覧

■設問1：次の文を読み、発達障害について正しい文には○、正しくない文には×を記入して下さい。

1. 何度注意しても、やってはいけないことをする場合には、大声でしかりつけたり、罰を与えたほうが理解してもらいやすい。
2. こだわり行動がみられることがあるが、それらの行動はなるべく禁止したり、強制的にやめさせたほうが症状が軽くなりやすい。
3. 失礼な行動や自分勝手な言動をしてしまうことが多いが、本人は悪気がない場合が多い。
4. ストレスを受けやすいので、強迫性障害、うつ病などの病気を起こしやすい。
5. 音・触覚・匂いに敏感な場合は、生活のなかで我慢させてそれらの刺激に慣れさせるほうがよい。
6. すべての発達障害者には、一人で行う仕事があっている。
7. 周囲のことを気にしていないように見えるが、案外気にして自信をなくしていることもある。
8. 誰とでも仲良くつきあい、たくさんの友人をつくるのが大事である。
9. 現在できないことでも、励まして繰り返し練習させることが一番だ。
10. 好きなことには熱心に取り組むので、好きなことを生かした仕事を必ず選択することが大事だ。
11. 多くの単語を知っているが、話すほどには意味を理解していないこともある。
12. 聞きとりが苦手な人の場合、聞く練習を毎日取り組むとよい。
13. 発達障害の青年に、友人は必要ない。
14. 「ちゃんと」「ちょっと」と言われても、あいまいなため、うまくできないことが多い。
15. 自主性を尊重して何もかも本人任せにするよりも、「きちんと教えること」「きちんと制止すること」が必要な場合がある。
16. 発達障害の人は、犯罪行為をおかしやすい。

■設問2：次の文を読み、答えを a.b.c.の中から選び、回答欄に記入してください。

1. 発達障害の人の知的能力・対人能力・生活能力のレベルは
 - a. 年齢が変化しても変わらない
 - b. 就労に際しては特に重要ではない
 - c. 介入とサポートの重要度とは一致しない
2. すべての広汎性発達障害の人には次の点において障害がある
 - a. 視力と行動
 - b. 数学、衛生面、行動面
 - c. コミュニケーション、学習と行動、社会性
3. 発達障害の原因は
 - a. 遺伝
 - b. 育児方法の誤り
 - c. 先天性の障害であるが、その詳細はまだわかっていない

■設問3：次の文章は家族が困っている事例についての文です。文章を読み、「原因として考えられること」を本人の気持ちに即して、できるだけたくさん書いてください。

1. 親に反抗する：20歳の男性です。10代は比較的素直な子どもだったのに、最近親に反抗することが増えました。親の言うことを聞かず、口答えをすれば、反対に親が話しかけても返事をしないときもあり、両親は困っています。
2. 散らかし放題：25歳の男性です。小学校5年生の頃から自室を与えているのですが、一度も片付いたことがありません。見かねて親が片付けると怒り出します。物をなくすことも多く、その点では本人も困っているようです。
3. 気力がなくだらだらした毎日：21歳の女性です。専門学校を中退してからずっと家にいます。昼夜逆転して、インターネットゲームばかりしています。お風呂にもめったに入りません。

以上

厚生労働科学研究費補助金（障害保健福祉総合研究事業）
分担研究報告書

生活および労働に関して発達障害者に適した機器の開発

分担研究者 石渡利奈

国立障害者リハビリテーションセンター研究所 研究員

研究要旨

発達障害のある者に有効な、「地域生活および労働に役立つ支援ツールの提案」に向け、既存の支援ツールと新たに開発される可能性がある支援ツールを把握するためのリスト作成を行った。さらに、既存の支援ツールの現場での利用可能性、ならびに、新たな支援ツールの開発可能性を探るために、全国の障害者就労に積極的に取り組む事業所に対し、アンケート調査を行った。リスト作成の結果、対人関係に関する困難さを支援するツールの少なさが確認された。特に、「思考機能（b160）」や「高次認知機能（b164）」など、自己コントロールの支援を必要とするツールは開発されにくいことが把握された。一方で、業務に関する困難さのうち、特に、「注意機能（b140）」や「記憶機能（b144）」など、視覚刺激の軽減や強化、情報の可視化で対応できる困難さに対しては、ツールが開発されやすい傾向にあることが確認された。また、調査の結果、現段階では事業所のうちの多くが発達障害のある者の雇用ならびにその雇用を支援するための支援ツールへの関心が乏しいことが推察されたとともに、既存の支援ツールも利用しにくいと考えられていることが示唆された。今後は、教育段階の訓練や、就職後の環境調整によっても解決されにくい、「自己コントロールの困難さを支援するツール開発の在り方」を検討していくとともに、既存の注意や記憶を補う支援ツールについても、「発達障害のある者の認知負荷に配慮したより使いやすい支援ツール」へと改良していくこと、また、それらを「職場環境で役立つ形」で提案していくことが重要である。

研究協力者氏名・所属機関名及び所属機関における職名

寺田容子（国立障害者リハビリテーションセンター研究所・流動研究員）

庄司百合子（国立障害者リハビリテーションセンター研究所・技術補助員）

A. 目的

発達障害者の生活・就労の補完的手段として、IT技術を用いた機器やソフトウェアが提案されている。移行支援においては、知識や技能の習得など当事者の適応力を高

めるアプローチとともに、これらの補完的手段を用いて生活や仕事の円滑化を図ることが求められる。

本分担研究の目的は、発達障害者に有効な就労・生活支援に向けた支援ツールの開

発に向け、彼らの生活・労働に役立つ支援ツールの開発ニーズを把握するとともに、それに基づく支援ツール開発のコンセプトを提案することである。これに対し、一昨年度（1年目）は、文献調査を通し、発達障害者の支援ツールの開発ニーズを発達障害者向けの支援ツールの開発動向から考察した。そして、昨年度（2年目）は、実際の事例が示す困難さに対して、支援ツールを適用する実践を通し、発達障害者の支援ツールの開発ニーズを事例的に考察した。

3年目となる今年度は、過去2年間の研究の総括として、地域生活および労働に役立つ支援ツールの提案を行うことを目標とする。そのために、過去2年間の知見をより深めるための研究手続きとして、既存の支援ツールと新たに開発される可能性がある支援ツールを包括的に把握するためのリスト作成を行った。さらに、全国の障害者就労に積極的に取り組む事業所に対しアンケート調査を行うことで、既存の支援ツールの現場での利用可能性、ならびに、新たな支援ツールの開発可能性を考察した。

B. 方法

1. 既存の支援ツールと新たに開発される可能性がある支援ツールを包括的に把握するためのリスト作成

発達障害のある者の就労に向けた支援について知識を持つ研究協力者2名（発達障害のある者の就労支援もしくはその準備支援にかかわった経験を持ち訓練〔教育〕によっても困難さの改善が難しい事柄について知識を有する）との協議から、「既存の支援ツールと新たに開発される可能性がある支援ツールを包括的に把握するためのリスト（資料1）」を作成した。

同リストにおける「発達障害者の就労上の困難さ」は、研究協力者が発達障害のある者の就労支援に関する文献35点から抽出した「行動レベル面の困難さ」を系統的に項目化したものになる。これらに対し、まず、研究協力者から「困難さの軽減・解決に向けた環境調整のアイデア」について意見を得てリストに加えた。次に、研究協力者から、環境調整のアイデアからみた場合の「各困難さの軽減・対処策としての既存の支援ツール（1年目、2年目の研究で把握されたもの）の役割」について意見を得て、その対応関係をリストに示した。最後に、開発されやすい既存の支援ツール、開発されにくい支援ツールの特徴を把握するために、発達障害者の就労上の困難さをICFの「心身機能」ならびに「活動」の項目（コード）と対応づける作業を行った。

2. 既存の支援ツールの現場での利用可能性、ならびに、新たな支援ツールの開発可能性

現在、発達障害者は、障害者雇用率制度の対象となっていないため、発達障害者を積極的に雇用し、彼らのニーズに即した人的・物的支援を積極的に提供する事業所は大変少ないと考えられる。そこで、過去に、「障害者雇用優良事業所」「障害者雇用職場改善好事例受賞事業所」として表彰経験のある事業所に対して、既存の支援ツールの現場での利用可能性、ならびに、新たな支援ツールの開発可能性を探るアンケート調査を実施した。アンケートは、郵送法で送付し、発達障害のある者の支援ツールについて興味がある場合には、FAXにて返信するよう求めた。アンケート票は、A4・

裏表1枚であり、表に示した支援ツール(日本国内での入手のしやすさ、現場での活用機会の程度を考慮して、1. のリストより15個選定)についての使用経験や使用に対するニーズについて尋ねた。支援ツールについては、名称だけではイメージがわきにくいことを考慮して、イメージ写真をつけるとともに、そのツールには「どのような機能があり、それは、どのような困難のある人に、就労場面で具体的にどのように役立てられるか」を説明する文章をつけた(表1)。

C. 結果と考察

1. 既存の支援ツールと新たに開発される可能性がある支援ツールを包括的に把握するためのリスト作成

まず、「発達障害者の就労上の困難さ」に関する50項目について、「困難さの軽減・解決に向けた環境調整のアイデア」を得たところ、これらは、大きく、「困難さのある能力を伸ばすための学習機会の設定(育成支援)」と、「困難さのある能力を補完し、必要な活動に取り組めるようにするための配慮(代行支援)」に分かれることが把握された。前者の特徴としては、「思考機能(b160)」や「高次認知機能(b164)」など自己コントロールが必要なものとなっており、後者の特徴としては、「注意機能(b140)」や「記憶機能(b144)」など視覚刺激の軽減や強化、情報の可視化などを行えば対処できるものとなっている。そして、支援ツールの開発傾向をみると、後者については、支援ツールが比較的開発されやすい傾向にあるのに対し、前者については、支援ツールが開発されにくい傾向にある。

前者に関する困難さとしては、例えば、「32 気持ちのよい挨拶や返事をしたり、お礼の言葉、お詫びの言葉を述べるのが難しい」「33 人にうまく支援を求めるのが難しい」「34 人からの支援を受け入れるのが難しい」「35 会話を失礼のない形で成立させるのが難しい」…などがそれにあたるが、これらの対人関係時の自己コントロールの弱さから生じる困難さに対しては、対応可能な支援ツールがまったく存在しないという結果であった。

これに対し、これらの「環境調整案」をみると、「学習機会の設定」と「周囲の本人特性理解」などが多く挙げられていた。これは、教育的な訓練により能力を育成していくことが必要であるが、それでも困難さが解決されない場合は、職場において周囲の者が本人の障害特性を理解した配慮を行う、というアプローチをとることが求められることを意味している(資料1)。

支援ツール開発のニーズを探るために、研究協力者に対して環境調整の実施のしやすさについて尋ねたところ、「これらはどちらも不可欠な取り組みであるものの、現段階では、職場において発達障害のある者の障害特性をふまえ、柔軟な対応に取り組むという後者の取り組みに積極的な事業所は少ないのが実情であり、職場では最低限のマナーやルールを身につけ、職場の人と協調して仕事に取り組めることが重要視される、この部分が身につけていないと就労継続が困難となる」という意見を得た。

これに対して、「自己コントロール」の困難さは、昨年度の事例研究を通し、訓練だけでは解消が難しいという知見を得ている。よって、これらの知見を総括して考えれば、